

蘇村金

江蘇工業學院圖書館
藏書章

第一卷

講談社



蕪村全集 第一卷 発句

一九九二年五月二五日 第一刷発行

校注者 尾形 仿・森田 蘭

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二

郵便番号 一一二〇一

電話

文芸局(〇三)五三九五―三七〇一

書籍第一販売部(〇三)五三九五―三六二二

書籍製作部(〇三)五三九五―三六一五

定価 九八〇〇円(本体九五・一五円)

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局宛にお願いいたします。

©Tutomu Ogata & Ran Morita 1992. Printed in Japan.

ISBN4-06-252201-2 (文芸)

発句

校注

森尾
田形

蘭 仿

刊行の辞

蕪村は、画・俳両面にわたり、十八世紀日本の文人精神を代表する唯美の世界を築いた。その芸術的生命は、子規・碧梧桐・夏目漱石・野口米次郎・与謝野晶子・萩原朔太郎・佐藤春夫・三好達治・草田男・秋桜子・田中冬二・安東次男・山本健吉ら、近代の芸術的創造と深くかわりつつ、今に生き続けている。

だが、これら『近代蕪村派』の間における蕪村熱の高さに比し、蕪村に関する根本資料の集成・整理といった学問的作業が著しく立ち遅れてきたことは、否定できない。初めて本格的な蕪村資料の集成を志し、大正十四年、芥川竜之介の序を付して『蕪村全集』を刊行した先達額原退蔵博士は、昭和二十三年、その新訂を試みたが、不幸病没により未完に終わった。昭和四十七年、岡田利兵衛氏らによって編まれた『蕪村集』は、新たに編年順の配列法を採り、画期的成果を示したが、それからもすでに約二十年の歳月が経過している。

本全集は、そうした経過と現状に鑑みて、それら先学の業績を踏まえ、その後の成果を取り入れるとともに、新たに次の諸点に配慮して編纂したものである。その一は、絵画編を設けて、蕪村の全容を画・俳両面から照らし出すこと。その二は、撰集編を設け、個々の作品の、時代と衆の中における意味が見えるようにすること。その三は、作品の編年順配列を徹底するとともに、一々に注釈を加え、広く愛好者の読解の便に供すること。

その微意を諒とされて寄せられた多くの方々の御厚意と学恩を深謝するとともに、幸いにして本全集が、蕪村の全貌を現代に明らかにして、新しい創造に役立つことができるとすれば、編者としてこれに過ぎる喜びはない。

平成四年一月

編集委員 尾形 仿(代表) 中野 沙恵

佐々木 丞平 丸山 一彦

桜井 武次郎 山下 一海

(五十音順)

目次

凡例

元文二年 (一七三七)	六
元文三年 (一七三八)	九
元文四年 (一七三九)	九
元文五年 (一七四〇)	一〇
寛保二年 (一七四二)	一〇
寛保三年 (一七四三)	一三
延享元年 (一七四四)	一三
元文ノ寛延年間 (一七三七～一七五〇)	一五
宝暦元年 (一七五一)	一六
宝暦二年 (一七五二)	一九
宝暦初年	二〇
宝暦四ノ七年 (一七五四～一七五七)	二二
宝暦五年 (一七五五)	二二
宝暦六年 (一七五六)	二三
宝暦七年 (一七五七)	二三
宝暦八年 (一七五八)	二三
宝暦十年 (一七六〇)	二四
宝暦十二年 (一七六二)	二五
宝暦ノ明和初年	二五
明和三年 (一七六六)	二六
明和四年 (一七六七)	二七
明和五年 (一七六八)	二八

明和六年（一七六九）	九
明和七年（一七七〇）	一〇
明和八年（一七七一）	一〇
明和年間	二七
安永元年（一七七二）	三三
安永二年（一七七三）	三六
安永三年（一七七四）	三六
安永四年（一七七五）	三七
安永五年（一七七六）	三九
安永六年（一七七七）	三九
安永七年（一七七八）	四〇
安永八年（一七七九）	四〇
安永九年（一七八〇）	四一
天明元年（一七八一）	四一
天明二年（一七八二）	四一
天明三年（一七八三）	四一
安永七年～天明三年（一七七八～一七八三）	四一
年次未詳	四一
存疑	四一
誤伝	四一
追補	四一
五十音索引	四三
季語別索引	四六
解説	四七

凡 例

一 内容と構成

本巻は、蕪村の発句として伝存する全作品を、存疑句・誤伝句をも含めて、すべて集成し、校異と注解を加えたものである。巻末には「五十音索引」(全句)「季語別索引」(誤伝句は除く)を付載し、検索の便に供した。

二 配列

作品の配列は、推定可能な限り、成立ないし発表年次順に従い、年次未詳句は季題順、存疑句・誤伝句は五十音順に配列した。

年次推定の別を示すため、その根拠となった脚注欄の出典文献名の上に、左の記号を付し、左注欄にその推定理由を注記した。

。 その年と確定。

⇒ その年、もしくはそれ以前。

⇐ その年、もしくはそれ以後。

* その年と推定。

** その年と推定されるも、不確定。

三 通し番号

右の配列順に従い、全作品の句頭に通し番号を付した。ただし、たとえば前書から元文・寛延年間に成ったと推定される

17火桶炭団を喰ふ事夜ごとく／＼にひとつゝ、

の句を、明和五年十一月四日、三葉社句会の兼題句として再

出しているような場合、後者には新しい番号を与えず、320のようにその句のすぐ前の配列句とダブル番号を付した。

四 本位句と異形句

同一句について複数の句形が伝えられる場合、原則として定稿と考えられるものを本位句に立て、異形句はその左に一字下げておおむね初稿・再稿の順に併記した。ただし、初稿・再稿の成立年次が明らかな場合、それぞれの年次に別掲したものもある(例、1279 1406 1623、1167 1435)。

五 前書

前書のうち、第四巻「俳詩・俳文」篇と重出するものは、(前書略)(前文略)(中略)(下略)として適宜省略し、脚注欄に↓文と注記した。

撰者の付した説明的前書は、左注欄に示した。また、前書の異同も、左注欄に注記した。ただし、出典書における部立て名等は、原則として省略した。

六 校訂

発句・前書および左注欄における引用句文を通じ、本文はすべて底本記載のままに掲出した上、読解の便宜のため、適宜、濁点・振り仮名(前書・引用文にはさらに句読点)を施し、漢字・仮名の字体は原則として現代通行のものに改めた(ただし、貞・哥・籀・帯・凡巾など、当時の慣用を尊重し、底本の字体をそのままに存したものも若干ある)。

底本における誤字・当て字や、仮名遣い・送り仮名等の現

行古文表記と相違するものは、正しい形を右行間に（ ）に入れて傍記した。また、仮名書きの本文に対し、右行間に（ ）に入れて漢字を傍記し、意味のとりやすいように配慮したものもある。なお、本文の表現や表記が誤植と誤解されるおそれのあるものについては、（ママ）と傍記した。

底本に誤脱・虫損等のある場合、他の文献から正しい形の推定できるものは、本文は正しい形で掲げ、左注欄にその旨を注記した。

本文中の漢文表記に対しては、適宜、送り点・送り仮名を施し、もしくは平仮名による読み下しを傍記して、読解の便を図った。

底本にある片仮名による振り仮名や、一等の音読符号等はそのまま存し、また底本に付された濁点は（ママ）と傍記した。

七 脚注

脚注欄には、掲出句の直接典拠とした出典文献名を（ ）に入れて示した。同句形を収める文献が他にある場合は、以下に続けておおむね年代順に併記した。ただし、同句形の場合、用字の相違は無視し、読み方の決定に関係するもののみを、左注欄に注記した。

なお、出典文献は蕪村生前を主とし、『蕪村句集』（天明四年刊）以降のものは、『新五子稿』（寛政十二年刊）『蕪村遺稿』（稿本）以外、おおむね省略に従った。ただし、『題林集』（『俳諧発句題林集』寛政六年刊）『題苑集』（『俳諧発句題苑集』寛政十一年刊）『題叢』（『発句題叢』文政三年刊）等ポピュラーな文献に句形が誤り伝えられてきている場合には、その旨を左注欄に注記した。

出典文献名は、『俳諧古選』→古選、『俳諧新選』→新選など、簡略な呼称に従った（十参照）。ただし、歳旦帖・春興帖などについては、撰者名を挙げ、『内に正式書名を示した。掲出句が第四卷「俳詩・俳文」篇に所出するものは、所収文献名の下に↓文と注記し、同じく第二卷「連句」篇の発句として重出するものは、その所収文献名の下に↓連と注記した。

八 左注

左注欄には、前書・句形の異同、表記の異同、出典文献における当該句の所出状況、合点、年次推定に関する事項等を注記した。

九 頭注

頭注欄には、♣季語、○語釈、▼句意、↓参考事項を注記した。

同一季題による発句が連続する場合には、その最初の発句の季語に♣印を付した。

季語を直接詠み込まず、言い回しや句意によって季語を利かせてある場合は、該当する季語を（ ）に入れて示した。

頭注欄における引用は、読解の便を考慮し、適宜、漢字・仮名を当て換え、仮名遣い・送り仮名を補正するなど、読みやすい形で掲げた。

なお、引用の漢詩文は、原則として当時通行の和刻本によったが、送り点・送り仮名等は適宜取捨した。

十 略称

脚注欄等に頻出する文献名には、左のごとき略称を用いた。（ ）内がその原名である。

(1) 自筆句帳（蕪村自筆句帳）

- (2) 句集 (几童編『蕪村句集』天明四年刊)
- (3) 遺稿 (稿本『蕪村遺稿』享和元年開版出願)
- (4) 落日庵 (稿本『落日庵句集』田福・百池筆)
- (5) 夜半叟 (稿本『夜半叟句集』安永五年起稿、月居・蕪村筆)
- (6) 高德院 (稿本『高德院発句会』明和八年起稿、百池筆)
《以上六点、本全集第三卷「句集・句稿・句会稿」篇所収》
- (7) 評卷 (蕪村加月溪吟歌仙、その他)
《本全集第四卷「俳詩・俳文」篇所収》
- (8) 文集 (忍雪・其成編『蕪村翁文集』文化十三年刊)
- (9) 句集拾遺 (秋声会編『蕪村翁句集拾遺』明治三十年刊)
《注 蕪村翁句集拾遺》
- (10) 露石本 (水落露石編『蕪村遺稿』明治三十三年刊)
- (11) 岩本『全集』(岩本祥石編『標註蕪村俳句集』明治三十九年刊)
- (12) 王城 (田中王城編『君波居士に宛たる蕪村翁の墨蹟』大正八年刊)
- (13) 頌原『全集』(頌原退蔵編『蕪村全集』大正十四年刊、昭和二十三年新版刊)
- (14) 画人 (河東碧梧桐編『画人蕪村』大正十五年刊)
- (15) 真 (河東碧梧桐編『俳人真蹟全集第七卷・蕪村』昭和五年刊)
- (16) 上方 (三越大阪支店編『上方俳星遺芳』昭和七年刊)
- (17) 遺芳 (京都博物館編『蕪村遺芳』昭和七年刊)
- (18) 名画譜 (夜半会編『蕪村名画譜』昭和八年刊)
- (19) 夜半亭蕪村 (稿本『夜半亭蕪村句集』蕪村書き入れ、乾木水「新蕪村句集の再発見」(俳句研究・昭和九・六)同「蕪村と金毘羅(一)」(こんびら・昭和九・八)に一部紹介)
- (20) 日経蕪村 (鈴木進編『蕪村』昭和三十三年刊)
- (21) 書画 (座右宝刊行会編『俳人の書画美術第五卷・蕪村』昭和五十二年刊)

和五十二年刊)

逸翁 (佐々木丞平編『蕪村・逸翁美術館藏品目録』昭和五十八年刊)

角屋資料 (大谷篤藏編『島原角屋俳諧資料』昭和六十一年刊)

右の(1)~(5)については、それぞれの集における通し番号をも示した。

なお、目録類については、「昭和九、稲束家入札」(昭和九年一月、摂津池田・稲束聴松軒入札目録、大阪美術倶楽部)、「昭和三八、俳諧資料展」(昭和三十八年十月、全国俳文学大会・高岡美術館協賛、俳諧資料展図録)、「昭和五八、与謝蕪村展」(昭和五十八年九月、没後二百年―与謝蕪村展、日本経済新聞社)のごとく略称し、また、書簡類についても「安永八・一・二五 几童宛」(安永八年正月廿五日付、几童宛書簡)のごとく略記した。「九・三 几童宛」とあるのは、月日のみ記され年次を明確にしない場合である。

また、短冊・書簡・自画賛等で真蹟と確認しがたいものについては、「自画賛」のごとく、印を付して区別した。
なお、短冊・自画賛等で数種の文献に重出するものは、原則として初出の文献名を示した。

十一 分担

本巻の編集については、当初、本文を尾形、頭注を森田が分担した。ただし、頭注は、森田が礎稿を完成した段階で病没したため、尾形が右の礎稿を勘案しつつ全面的に書き改めた。

索引は、尾形の指示にもとづき講談社編集部の浜田弘美が作成した。

1 〇十夜(冬) 浄土宗で行う陰曆十月五日夜から十五日朝までの念仏法要。京の真如堂で始まり のち鎌倉光明寺で普及、宗門の男女群衆した。〇尼寺 鎌倉尼五山の一つ東慶寺を指す。離縁を望む女性の縁切り寺として知られた。〇さねかづら モクレン科のつるくさ。元文・寛保ごろまで茎の粘液を髪の手入れに用いた。▼東慶寺に在る尼のもとに、ゆかりの男から、そろそろ還俗だネとさねかづらが届いたのは、皮肉にも世間

に念仏の声響きわたる十夜の日であった。

『卯月庭訓』の「鎌倉詠物」は、鎌倉へ届けるよう特に注文した品の意。「鬘葛」は、鬘水用のさねかづら。



2 〇とし忘れ(冬) 年末に親族が集まり知人・奉公人も加えて一年の息災を祝し合う宴。▼年に一度の年忘れをこうして二度三度と重ねたのも、天下泰平、あらがたい御代のおかげか。

3 〇年の市(冬) 十二月中旬から大晦日にかけて正月用品を売る市。浅草寺・深川八幡・神田明神の境内をはじめ 各地に立った。▼年の市はたいへんな入出。春の仕度に皆熱中している中で 買物をよそよそかなたの冬空にくつきりと浮かぶ富士山を、のんびり見ながら歩む人もいる。これまた反俗の人。

4 〇師走(冬) ▼のんびり梅の鉢を掲げた自分に行き交う師走の往来の人々の、何とせわしないこと。

元文二年(一七三七)丁巳

二十二歳

1 尼寺や十夜にとゞくさねかづら

鎌倉詠物

尼寺や十夜に屈く鬘葛

〇『卯月庭訓』(露月ら撰、元文二冬成、同三夏刊)に文を披見する女性を描き、「宰町自画」と署名。

2 君が代や二三度したるとし忘れ

〇底本に「宰町」と署名。

〇(夜半亭「元文三年正月」)

元文三年(一七三八)戊午

二十三歳

3 不二を見て通る人有年の市

〇底本に「宰町」と署名。

〇(夜半亭「元文四年歳旦」)

4 梅さげた我に師走の人通り

〇底本に「宰町」と署名。

〇(元文四樓川「歳旦帳」)

5 お師走(冬) ○お物師 公家・武家・富裕な町家に仕えた女の裁縫師。物縫い・お居間ともいう。▼

お物師が人の起き始める夜明けを寝ているのも、忙しい師走の一点景。正月用の晴れ着の仕立てに追われ、昨日も徹夜になったと見える。

5 お物師の夜明を寝る師走哉

（時々庵「己未歳旦」）

元文四年（一七三九）己未 二十四歳

6 お梅(春) ▼早春、美しく開花した梅の木の下で乞食の妻が夫の背の虱をとっている。彼らにも春は訪れたのだ。美醜の混融。

6 虱とる乞食の妻や梅がもと
○底本に「宰町」と署名。

（時々庵「己未歳旦」→連）

7 お霜(冬) 季感と幾星霜の意を掛ける。○みそみめぐり 「味噌」から「三十」へ言い掛けた。▼法事の精進料理に使うのに摺り卸される味噌玉が摺り鉢の中を巡るように、歳月は巡り巡って今日は故人の三十三回忌、寺の庭に置いた霜も過ぎてきた星霜の久しさを偲ばせる。（嵐雪は宝永四年十月十三日没。其角は同二月二十九日没。）

7 摺鉢のみそみめぐりや寺の霜
○『桃桜』（元文四・一一跋）に「宰鳥」と署名。○『落日庵』に「其角三十三回」、『句集』に「晋子三十三回」と前書。後者に中七「みそみくりや」と誤る。○真蹟（宋阿の文に添ふる辞↓文）に「余が句へすり鉢のみそみめぐりや寺の霜」とかの集に見ゆ」と引用。○季節から、実は嵐雪三十三回忌追善句。

（桃桜）真蹟↓文・落日庵788・句集760

元文五年（一七四〇）庚申 二十五歳

8 行年(冬) ○つくば 筑波山。歌枕。○桜川
茨城県西茨城郡岩瀬町の鏡池を源とし、筑波山の西麓を南流、霞が浦に注ぐ。上流域の磯部は古来桜の名所。蕪村の滞留した結城・下館に近い。謡曲「桜川」の舞台。歌枕。○芥 ごみ。「散りぬれば、後は芥になる花」と思ひ知る身もさていかに」(謡曲・桜川)。▼連歌にゆかりの筑波山麓に新春を待つ感懐。花で名高い桜川に、今年の花の塵ならで煤払いの塵芥が次々に流れ、年も過ぎ行くうとしている。今年の垢を流すだけ流して、美しい俳諧の花咲く春を待望する思いしきり。

8 行年(と)つくばの山本に春を待
や 芥(あ)流るゝさへくら川

○底本に「宰鳥」と署名。

旦(夜半亭「辛酉歳

寛保二年（一七四二）壬戌

二十七歳

宋阿の翁おきな、このとし比ひ予こが狐独こなるを拾ひろひ

たすけて、枯乳こたゆの慈恵じけいのふかゝりけるも、

さるべき（宿世）すくせにや、今や帰らぬ別れとな

りぬる事のかなしびのやるかたなく、胸う

ちふたがりて云ふべく事もおぼえぬ

9 我わが 泪なみだ 古 く は あ れ ど 泉 かな

○『西の奥』に「東武宰鳥」と署名。

。（西の奥→文）

9 泉（夏） ○宋阿 巴人。日本橋石町に夜半亭を

営み、江戸俳壇に孤高を保った。蕪村の師。寛保二年六月六日没、六十六歳。○枯乳の慈恵 乳の枯れた祖母が孫に注ぐような深い愛情、の意か。▼師を失った私の涙は止めどなくあふれ、古いたとえながら、泉のごとくである。「泪」「泉」で枯乳に対した。▽蘇東坡「我淚猶可拭（中略）漲乳已流牀」（円機活法巻8・瘦子）。

10 涼し（夏） ○九十

九袋 秋田県南秋田郡八郎潟町夜叉袋。八郎潟湖東街道沿いに位置する。○麦を月夜 麦を「揚く」から「月夜」に言い掛けた。

▼昼の暑さを避け、夜風の涼しさに、月下に麦を揚ぐ男。名を問えば宇兵衛というよし。これぞまさに月中に餅を揚ぐ卯兵衛（兎）といえよう。



自画賛(回)

寛保三年（一七四三）癸亥

二十八歳

出羽の国よりみちのくのかたへ通りけるに、

山中にて日くれければ、からうじて九十九

袋といへる里にたどりつきて、やどりもと

めぬ。（下略）

10 涼しさに麦を月夜の卯兵衛哉

○前文および次句より寛保三年か。あるいは晩年回想の作か。

**（自画賛の回）食
↓文）句集拾遺↓
文

11 ④月(秋) ○うつせ貝 貝殻。和歌では「むなし」に掛かる枕詞に用いる。▼松島の月を見る人は、岸辺に打ち寄せられた中味のない貝殻か。せっかく訪れながら、かつての芭蕉のごとく、あまりのすばらしさに句作成らず、ただむなしく嘆賞するのみ。

12 ④水満る(冬) ○遊行柳 今の栃木県那須郡那須町芦野にある、西行が「道のべに清水流るる柳陰し」としてこそ立ち止まりつれ(『新古今集』)と詠んだという柳。謡曲「遊行柳」に脚色する。芭蕉「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」(おくのはそ道)。▼冬の初め、遊行柳のもとに立ち寄ると、西行がその陰に憩った柳の葉は散り果て、「清水流るる」と詠んだ清水も満れて、所々に露出した大きな石が、いかにも寒さむと見える。蘇東坡「山高月小 水落石出」(古文真宝後集巻1・後赤壁賦)のイメージを重ね、優美な歌枕の荒寥たる相貌を発見した、漢詩文調の警句。

11 松島の月 見る人やうつせ貝
○『新五子稿』に中七「月見ぬ人や」と誤る。○『杖の土』(宋屋撰、宝暦五刊)に、延享三年三月二十三日、宋屋の松島遊歴の条に先作の一として所出し、延享二年秋以前。『新花摘』所収の埋木の逸話と潭北の没年(延享元・七・三)より推せば、寛保三年か。

遊行柳のもとにて

12 柳 散 清 水 涸 れ 石 処

○『反古衾』に「神無月はじめの頃は、下野の国に執行して、遊行柳とかいへる古木の影に、(陰) 目の景色を申出はべる」、『古選』に「神無月の始、道のべの柳かげにて」、『落日庵』に「遊行柳にて」、自画賛に「(前略) むかしみちのくに行脚せしに、遊行柳のもとにて(下略)」、『句集』『新五子稿』に「遊行柳のもとにて」と前書。○『自筆句帳』『耳たむし』『落日庵』『句集』に秋の部に掲出(季語「柳散」)。○『古選』に「老成鍛練、是素堂之風骨」と付評。○なお『名所方角集』『名所小鏡』『題林集』『不二烟集』『俳諧品彙』等にも所出。○自画賛の前書によれば、10 11と同じ旅次の作か。

*(杖の土)

(自筆句帳537)反古衾↓連・古選・耳たむし・落日庵
・*自画賛(真)↓文・句集481・新五子稿

13 〇衣くばり（冬） 歳末に正月の晴れ衣裳を女性に贈る風習。〇水引 水引と水引草を掛ける。〇穂に出穂を伸ばす意と、表に現れる意を掛ける。▼衣配りに晴れ小袖を包んで結んだ水引も、水引草の花のように華やかに長く立ち伸びていることよ。裏に、内に包んだ恋心も、この贈り物をしたことで、はつきり外に出てしまったネ、の意を匂わせる。

〇底本に「宰鳥」と署名。

13 水引も穂に出けりな衣くばり

（寛保四字都宮
歳旦懸）